

文学史研究の方法的反省の ための一考察(2)

——ソ連における文学史学の新動向について——

藤井 一行

- 一 研究計画の進展
- 二 文学の比較的研究への動き(以上十月号)
- 三 『世界文学史』の構想(以下本号)
- 四 文学史認識の主要特徴

三 『世界文学史』の構想

現在、世界文学研究所内に設置された「世界文学史」部において、ロシア文学研究所、アジア諸民族研究所、スラヴ学研究所の協力のもとに『世界文学史』の要綱が作成されつつあるが、これまでに発表されたR・サマーリンの『世界文学史』にかかわる作業の若干の諸問題について(六二年)およびI・ニエウボコエヴァの『世界文学史の構成原理にかんする問題によって』(六三年)の二論文によって、『世界文学史』の叙述がどのような構想のもとにすめられようとしているかを観察してみたい。

まず、「世界文学」という概念の内容としてなにが考えられ

ているかを見よう。ニエウボコエヴァは「世界文学」の概念におよそ三つの内容が見られることを指摘する。その第一は、文字で書かれた文学の総体をさすばあい、第二は、もっともすぐれたとされる文学作品をさすばあい、第三は、社会の一定の発展段階で国際的連関の拡大にもなつて成立する新しい文学の資質をさすばあい、である。この第三の「世界文学」概念はゲーテやマルクスが言及しているそれを意味する。しかし、ニエウボコエヴァはこの第三の意味での「世界文学」は資本主義時代には、「世界のすべての民族が対等の権利で創造に参与するところの世界文学」の第一歩にすぎず、その意味でのいわば真の「世界文学」はプロレタリア革命、社会主義世界体制の確立、共産主義の勝利の時代にはじめて実現されると考え、その芽をソヴェト多民族文学にみいだす。しかし、ニエウボコエヴァは右の三種の「世界文学」概念のいずれかをとるのではなく、「この概念の多義性そのものにも反映している世界文学発展のありのままの歴史的諸過程」をできるだけ完全に明らかにすることをもちって『世界文学史』の課題とする。

これにたいして、サマーリンはマルクスやゲーテに従って、「世界文学」を一九世紀初頭に形成される歴史的カテゴリーとしてとらえ、『世界文学史』は個々の民族文学から「世界文学」が形成される弁証法を考察し、今日の生まれつつある「世界文学」の法則性を明らかにすべきだ、と主張する。

したがって、『世界文学史』は右の二人の「世界文学」認識からすれば、前者にあつては、世界に存在する文学を、後者に

あつては特殊な意味での「世界文学」をその対象とするということになる。しかし、素材選択の原理として両氏が提示しているものに注目すると、『世界文学史』の構成内容にかんしての二人の主張はそうくいちがってはいないようにみえる(後述)。

それでは『世界文学史』ではなにをいかに明らかにしようとするのか。ニエウボコエヴァは、世界文学史は文学という形式における現実反映の歴史であるとともに、現実への積極的作用の歴史でもあるとして、この文学と社会生活とのかわりの二つの側面を歴史的發展と現代的意義において示し、かつ、諸民族文学の歴史的运动の中で世界の文学過程の重要法則性を示すことが『世界文学史』の任務であると主張する。そして、世界の文学過程の法則性については、長期的に作用するもつとも一般的法則性と、一定期間に作用するより個別的な法則性とを区別する。

後者の一例として、同女史は、社会主義社会での諸民族の接近という状況下での諸民族文学の相互作用という現象をあげ、前者についてはつぎの五つの法則性(主要部分のみ摘記)をもつとも重要なものとして提示している。

(1)文学と、社会史および社会意識の発展との連関が、あいことなる歴史段階においてあいことなる芸術的、思惟形態を規定する。世界の歴史過程の単一性が類似的歴史的条件下にある諸民族の文学の基本的特徴の類似性を規定するが、所与の時代の文学は民族的芸術伝統をもつ民族の精神的発展の諸要請の総合として成立するため、つねに非反覆的な独自の形態をとる。

(2)民族の成立とともに、人類の社会生活と芸術意識の中で、アリズムの発展がしだいに大きな意義をもつにいたる。社会主義アリズムは、芸術意識の発展における、新しい革命的意義をもつ段階である。

(3)世界文学史は、不均等性が認められるものの、人類の芸術的、思惟の前進的運動であり、その内容と形成のたえまない豊富化である。

(4)芸術意識の発展は、閉ざされた美領域での「内在的」運動によつてではなく、社会の歴史の行程の全体によつて規定される。すなわち、それぞれの時代の芸術意識、文学形象の発展はその時代の社会的経験と社会意識、イデオロギー闘争、時代の要請に照らしての過去の芸術経験や美思想の再評価によつて規定される。

(5)世界労働運動と社会主義思想の成長ともなつて、国際的な社会主義芸術文化が形成され、人類の文化発展の新しい革命的段階となり、社会主義アリズム文学の集団的経験が世界の現代の進歩的文学のもつとも權威ある力となる。

ニエウボコエヴァが世界文学過程の法則性として以上に提示したものは同時に同女史の(またある程度まではソ連の文学史学者一般の)世界文学史像の骨格を示すものとみることができよう。

しかし、それにもかかわらず、『世界文学史』は前記の諸法則性の例証のための叙述としてのみ構想されているのではない。ニエウボコエヴァは素材の選択にかんして、国際的影響を

与えたか否かにかかわらず、所与の民族文学の発展に本質的意義をもった文学過程と文学現象をとりあげるといふこと、すなわち、それが所与の民族の歴史的要請をどれだけ表現し、その民族の芸術意識の発展にいかなる寄与をなしたかという問題の視角から素材を選挙すべきことを主張する。そして、このさい進歩的ヒューマニズム思想の発展にもっとも著しく寄与し、文学の歴史に不滅の足跡をとどめた文学事象、民族の芸術文学に一義的意義をもったところのフォークロア、文学形成の重要要因となった哲学・歴史学上の著作に注意をばらう必要性をとくに指摘している。

また、サマーリンも、前述の「世界文学」認識にもかわからず、「世界のすべての民族の創造的天才を具現した、単一の、奇蹟的に多様な人類の文学の建物」(傍点引用者)の発展を示すこと、あるいは、あらゆる文学が人類の芸術にもたらした寄与や諸民族文学の歴史における重要諸契機や、諸民族が文学にもちこむ個別的なもの、非反覆的なるものを示すことの必要を強調している。とりわけ注目されるのは、二人とも「非反覆的独自性」といふものへの注意をすこぶる力説している点である。

ところで、『世界文学史』がどのような時代区分により、それぞれどの時代について具体的にどのような文学事象や問題について記述しようとするか、については二人ともまだ言及してはいない。ただ、一〇月革命以後の世界の文学過程についてはニエウポコエヴァがやや触れており、この時代にかんしては、第一に、国際的社会主义文学の成立と発展、あいことなる民族的

芸術伝統に由来する社会主义リアリズムの道の独自性、多民族社会主义国家における文学連関の新しい形態、社会主义リアリズム文学の集団的经验と現代の進歩的文学にとつてのその意義を明らかにすること、第二に、資本主義諸国の文学における分極化の過程、モダニズムとリアリズムとの闘争を示すこと、第三に、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの世界文学発展の一般的過程への参与を示し、形成過程の民主的文化と民族解放闘争との結びつきを明らかにするとともに、その分極化の過程、リアリズムの発展を示すこと、等の重要性を指摘している。

また、『世界文学史』の構成については、ニエウポコエヴァは、第一に、各巻の序論の部分で、所与の時代の重要な文学史上の問題を究明し、ブルジョア的理論を批判し、その時代に人類の芸術発展にもたらされた新しいものを特徴づけ、当代の芸術遺産のすぐれたものの不易の価値と後代への意義を示すこと、第二に、一定の民族的ないし「地域」的境界内で文学史過程を考察する諸章(たとえば、一定の時代のラテン・アメリカ文学にかんする章)のほかに、さまざまな民族文学の類型的かつ同時間的に近接した素材を対比的に考察する問題的諸章(たとえば、社会主义文学の形成・発展における文学的連関の役割にかんする章など)を設けることを提唱している。そして、具体的な素材にかんしては、主に重要作家の重要作品をとりあげ、所与の民族の生活と美思想の発展にもたらした新しいもの、他民族の文学への作用を明らかにし、若干の傑作をその時

代の他国文学の類型学的に類似した作品と比較考察すること、大芸術現象と、所与の民族および世界の芸術経験との関連を明らかにすること、等々を提言している。

右に見たように、『世界文学史』の構想は、サマーリンとニエウボコエヴァでは個々の問題点に関してはまだ見解の不一致が存在しているが、それが文字通り世界の文学過程を広く対象とし、その一般のおよび特殊の法則性を示すだけでなく、重要文学現象の個性的な価値や意味をも明らかにすべきものとして構想されている点では共通している、と言つてよい。

- (1) P. Самарин, О некоторых проблемах работы над историей всемирной литературы, Известия 1962, вып. 5; И. Неплюкеева, К вопросу о принципах построения истории всемирной литературы, Известия 1963, вып. 5. 以下、本文での引用はすべてこの二論文による。ただし、本文での紹介の順序は原論文のそれに従ってはいない。
- (2) 『地域』とは、世界文学過程にたいして、相互に歴史的に連関しあつた一定の文学圏を意味し、『地域』的方法とは所与の時代の所与の、歴史的・文化的条件の類似する諸国を一の『地域』としてとりあげ、相互間の比較考察をなすことを意味する。(Неплюкеева, op. cit.; Некоторые вопросы изучения взаимосвязей и взаимодействия национальнх литератур, 参照)。

四 文学史認識の主要特徴

さて、最後に、以上の観察および他の研究者の諸発言を通して看取されるソ連文学史学の重要特徴と思われるものをいくつか摘出してみたい。まず最初に確認しておかなければならないのは、マルクス主義というものを総じて学問研究の前提とするソ連文学史学はやはり法則化的認識というものをその基本的志向としているが、しかし、それにもかかわらず、法則化的文学史認識がそのまま直接的に社会発展に寄与するとは考えられておらず、とりわけどのような研究課題を設定し、とりわけどのような方法で研究をすすめるか、という問題が多少とも所与の歴史的問題状況に即して真剣に吟味されているということである。

すなわち、ソ連文学史学は、ソヴェト国民が推進しつつあるとされるところの共産主義建設という課題にこたえるという観点から、たえず、みずからの研究活動の適否を点検し、研究課題の意義、さらにその緊要性や有効性というものを問い、方法研究上の努力を重ねるようにみえるのである。そして、以下のような研究意識上の一連の特徴が生みだされるのはこの過程においてであると考えられる。

特徴の第一は、文学史研究における世界的視野の形成ともいふべきことへの努力である。これは一面では視野のいわば空間的世界への拡大の努力を意味する。このことは、まず、これまで看過ないし軽視されてきた諸民族——なかんずく、ソ連内部の諸民族をはじめ、スラヴ、アジア、アラブ、アフリカ、ラテン・アメリカの諸民族——の文学の研究の推進、文学史研究

におけるヨーロッパ中心主義の克服への努力にあらわれている。すなわち、これら諸民族の文化が世界文学における正当な地位を要求しているがゆえにも、また、それらの諸民族の文学史の研究なくして世界文学の発展の法則性を十分に認識しえないがゆえにも、文学史の研究や叙述におけるヨーロッパ中心主義の克服ということが意識的に追求されるのである。『ソ連諸民族文学史』編述という画期的な計画はその一例証といえるであろうし、さきに構想を概観した『世界文学史』が、文字どおり世界の文学の歴史たらしむべく意図されていることから、それは知られる。視野の空間的世界への拡大の努力はさらに、個々の民族文学史の世界文学史的背景における統一的研究——すなわち、諸民族文学史の相互連関や相互作用の研究（諸文学間の作用関係のみならず、世界文学史的過程としての等質性と民族的・歴史の独自性との連関の把握をも含むものとしての）への志向にみいだすことができる。

世界史的視野の形成への努力は他面で、視野のいわば時間的世界への拡大にみられる。それはなによりもロシア革命以後の、わけても第二次大戦以後の、「社会主義世界体制が人類社会の発展の決定的な要因に転化しつつある」（一九六〇年一月の共産党・労働者党代表者会議の声明）とされる現代の文学現象への積極的注目にあらわれている。社会主義世界体制と世界文学の新しい法則性、社会主義諸国の文学の集団的経験、資本主義諸国文学における社会主義リアリズムの発展、現段階の批判的リアリズムなどの研究課題の設定はその例証といえよ

う。

第二の特徴としてはリアリズム（ないし創作方法）中心主義ともいえる文学史認識の志向をあげることができよう。そして、その根底にはリアリズムをもって人間の芸術的認識のもっともすぐれた方法とする判断があるようにみえる。リアリズム討議集会の研究資料として準備された『世界文学におけるリアリズムの発展の基本的諸段階』（Ya・エリズベルク以下五人の研究者集団の作成になるもの）は、第一章「問題の意義」において、リアリズムの歴史的研究によって、合法的過程としての世界文学の歴史について、諸民族文化の相互連関について、人類の芸術発展の性格と方向についての科学的観念がえられることを指摘し、また同集会の冒頭の挨拶の中でI・アニシモフ世界文学研究所長は、自由のためにたたかいつつある諸民族にとっての「真実への、生活のこよなく深い知識への、生活の諸法則の把握への要求」からする大きな魅力に言及している。エリズベルクは論文『リアリズムの諸問題と文芸学の課題』で、リアリズム研究が文芸学においてとくに重要なものであり、中心的意義さえもつと強調している。世界文学研究所とロシア文学研究所の編述にかかる『ロシア文学史』（全三巻）はこのようなりアリズム中心の文学史認識の志向をはっきりと示している⁽⁶⁾。しかも、この点でとくに注目されることは、ソヴェト・ロシアにおいて最初に形成されたいわゆる社会主義リアリズムというものが人類の芸術的発展の最高⁽⁷⁾、質的に新しい段階として自認されているという点であろう。

第三には、文学史の法則化的認識にさいしての文学現象の独自性や特殊性というものへの積極的注目ならびにその尊重の態度を指摘しなければならない。これは一面では、文学史の法則性そのものの具体的・特殊の発現への注目(たとえば、D・フラーゴイが力説する文学発展の『内在的』法則性など)にみられ、他面では『非反覆的独自性』、すなわち個性的な価値というものの尊重にみられる。前掲の『世界文学におけるリアリズムの発展の基本的諸段階』はとくに、継承すべき伝統の多様性、そのおのおのの価値と芸術的独自性、それなりに世界芸術の宝庫を豊かにしつつある諸民族文学の発展の特殊性(傍点引用者)に注目する必要性を強調している。『世界文学史』の構成についてもそれが再三にわたって力説されていることはすでにのべたとおりである。これは従来マルクス主義文学史学がとかく普遍的な法則性の究明にのみ偏りがさであったことを反省し、民族的・歴史的独自性というものを統一的に把握していくことによって法則化的認識そのものを豊かにしていくこととするものだ、と言えるであろう。

以上、はなはだ粗雑にはあるが、ソ連文学史学の研究意識上の主たる特徴と見られるものを指摘した。私見では、それらは、わが国のマルクス主義文学史学が、『課題化的認識』の研究態度というものを再得していくうえで対決を要請されるところの重要な問題点をも意味するものである。

(一) Проблемы реализма в мировой литературе стр. 564; Известия. 1962, вып. 2, стр. 166. など。

(2) Известия, 1961, вып. 5, стр. 366.

(3) Основные этапы развития реализма в мировой литературе (Материалы к изучению проблемы), Известия, 1957, вып. 1, стр. 5—6.

(4) Проблемы реализма в мировой литературе, стр. 13—14.

(5) Ibid, стр. 575.

(6) 『ロシア文学史』第二卷(六三年)は一九世紀前葉をあつかっているが、その各章の構成は以下のとおり。序論「第一章」新たな文学時代への道、「第二章」積極的ロマン主義と批判的リアリズムの成立、「第三章」リアリズムの確立、「第四章」文学発展の幹線としてのリアリズム」。

(7) Известия, 1962, вып. 2, стр. 166.

(8) Д. Благой, Закономерности развития художественной литературы, известия 1957, вып. 6; К вопросу о закономерностях развития литературы, Известия, 1958, вып. 4; 669は無署名論文 К дискуссии о реализме, Известия, 1957, вып. 1.

(9) そのほか、たとえばB・ブールソフは、従来、リアリズムからの逸脱として評価するのがふつうであった一九世紀後葉のフランス文学を、独自の現象としてとらえなおそうとする。(Проблемы реализма в мировой литературе, стр. 555)

(一橋大学大学院学生)